

森のようちえんの理念と研究課題 (II)

～ミクリッツの理念から見たドイツ・スイスの事例～

杉山 浩之*・牧 亮太**・木村 美紀***・黒田 愛乃***
佐々木瑠里***・西原 瑤***

Concepts of Waldkindergarten (Kindergarten in the Forest) and Tasks of the Research (II):
Case Study of Waldkindergartens in Germany and Switzerland
at the point of Miklit's Concept of Waldkindergarten

Hiroyuki SUGIYAMA*, Ryota MAKI**, Miki KIMURA***, Yoshino KURODA***,
Ruri SASAKI*** and Yo NISHIHARA***

はじめに～森のようちえんの広がり (ドイツ・スイス・日本)～

2013年、ドイツでは1500近くの「森のようちえん (Waldkindergarten)」が全土に広がっている。2002年には320以上、2011年には700以上というデータもある。しかし、それはまだ幼稚園全体からするとマイノリティーであることに間違いはない。一方、ドイツでの展開に影響を与えたデンマークでは、公立で「森のようちえん」が認可され、その数は70園程度とされているが、最近の経済的な背景から財政難によって一部で統合が行われている¹⁾。

このようにドイツはデンマークの後進国であるが、NPO 法人を中心とした民間のパワーでデンマークを凌ぐ勢いである。ドイツでは、1990年代の終わりになってようやく、3～6歳の幼稚園の就学率がそれまでの30%から90%に向上したという事情もある²⁾。

この普及には「森のようちえん」が果たした

* 本学教授

** 本学専任講師

*** 本学初等教育学科30期生

役割も推測される。最近まで、ドイツにおいては「幼児は家庭で」という考え方が残っていた。しかし、東西ドイツの統一から東側の社会主義的な考えが導入され、母親も社会で働くという社会慣習が広まっていき、すべての幼児に入園の権利をという社会運動となっていった³⁾。

さらに、ドイツの森のようちえんにおいては、保護者も運営や保育ボランティアとして参加している。保育終了後の深夜に保護者も含めた会議なども行う所もあるようである。民主主義の発祥の地であるヨーロッパの教育経営の展開は、我が国の展開とは異質なものであることが、ここでも見えてくる。

日本においては、2013年の動きをみると、各地で新たな森のようちえんが誕生している。その数は、150～200程度と推測されている。その中には、野外活動センターなど既存の社会教育の場で、幼児教育の取り込みが増えている実態もある。

この点でヨーロッパと日本とでは、森のようちえんの定義が異なっている。日本では休日だけの森のようちえんの活動も、森のようちえんと呼んでいるからである。さらに、日本の場合

は、保育施設として無認可で運営しているケースが多く、補助金なしで運営している所がほとんどである。それは、保育者の労働条件を圧迫し、引いては保育の質を下げることになりかねない。日本においては、「森のようちえん全国ネットワーク」機構が2005年から全国フォーラムを立ち上げ、ホームページ上で会員普及を行い、指導者養成講座を展開している。第1回全国フォーラムは岩手県の栗駒高原の野外活動施設で、その後、2013年まで毎年開催され、参加者も年々増加し、第9回となる神奈川県愛川村での大会の参加者は700名を超えた。しかし、まだ組織としては脆弱で、年会費や会員名簿の発行はない。日本の研究者もごくわずかで正式な学会も発足していない。今後の課題であるが、認可や質の向上などの事を考えると、学会発足も必要なことと言えるだろう。

今後、森のようちえんが認可施設として発展していくためには、「森のようちえん」の定義を確立し、ハード・ソフト面での保育環境の条件整備が必要となってくる。2015年度から始まる「子ども・子育て支援制度」を見据えて、森のようちえんの認可の検討が「森のようちえん全国ネットワーク」や先進的な自治体（鳥取県や長野県など）において検討され始めている。本稿は、そうした動きを見据えながら、すでに認可制度のあるドイツ・スイスの事例を取り上げ、森のようちえんの実態を把握することを目的としている。その際、ドイツの森のようちえんの研究者であるミクリッツの理念を分析の視点として試みるものである。

筆者は、2013年9月11日～17日にかけて、5園の森のようちえんを視察した。その一部は、拙著でも触れている⁴⁾。本稿では、その視察の全体を報告する。スイスはドイツからの影響で、まだ森のようちえんは少ないが、小学校低学年

児童も「森の学校」(Wald-Schule)で就学することが出来ることが一つの特徴である。さらにスイスの森の学校は認可であっても補助金がないということである。これは、私学一般は補助金がないということと同じである。

さて、森のようちえんの視察園の選定は、以下のプロセスで行った。ここからは、「森のようちえん」の表記を「Wald-kindergarten」の綴りから「W-K」と表記する。しかし、日本の場合は、上の事情から元のままで表記する。

ドイツにおけるW-Kは、公立主体のW-Kを認可したデンマークからの影響を受けたが、公立ではなく、私立幼稚園として認可されていた。1990年代になり、その数は増え続け、1500を数えるということである(2013年度)。日本における森のようちえんは無認可であり、現在増え続けて、形態も土日開催、平日開催、不定期開催など様々である。日本の場合は、認可されても、ドイツと同じように民営が中心になると予想される。そこで、2012年12月に森のようちえん指導者養成講座が長野県・飯綱高原子どもの森幼稚園および研修センターで行われた際に、日本の森のようちえんネットワーク会長の内田幸一氏に、ドイツのW-Kの訪問地の推薦をお願いしたところ、韓国におけるW-Kの研究・指導者の張女史(Hee-Jung Chang)をご紹介いただいた。前著でも触れたように、韓国では2012年に「森林教育の活性化に関する法律」を成立させて、W-Kの普及を図っている。張女史は、かつてドイツに在住してドイツのW-Kを研究し、韓国とドイツ・スイスと日本の森のようちえんの実践報告を著わした。そこで、メールで張女史から訪問先の紹介をしていただくことになった。女史からは、ドイツ南部バイエルン州のW-Kを紹介していただき、さっそく、メールで訪問のお願い文書を、2013年2月に送信した。

しかし、なかなか良い返事がもらえず、5園に出したうち、一園のみ承認のメールが戻った。そこで5月に、ソウルのW-Kを視察し、張女史にお会いし、状況話をした結果、スイス北部の森の学校を含めて、新たなW-Kも加えて、ご紹介いただいた。これらは、張女史がドイツでW-K研究を行っていた時に交流のあった幼稚園である。その後、訪問先とはメールでやりとりしたが、最終的に確定したのは、9月の初め、視察の出発直前であった。視察の通訳・ガイドをお願いした池下興治氏は、これまでドイツ在住30年以上でベテランの通訳であり、最終確認の際は、ドイツ語で電話やメールを使って、訪問時間や訪問の主旨・質問項目などを調整していただいた。

I 視察の概略とW-K (W-S) の特徴

視察したW-Kは以下のとおりである。ドイツはバイエルン州ミュンヘン市の郊外に位置する。

- ① 9月11日 フライジング (Freising) 市、ブリュムクライゼル (Brummkreisel) W-K 9時から12時
 - ② 9月12日 ノイリード (Noyried) 市、ヴァルト・クレアティヴ (Wald-Kreativ) W-K 9時から12時
 - ③ 9月13日 オルヒング (Olching) 市、バイエルンホフ (Bauernhof) W-K 朝の集合から12時まで
 - ④ 9月16日 スイス北部バーデン市、バーデン (Baden) W-S (Wald-Schule) 朝の集合から11時まで
 - ⑤ 9月17日 スイス北部サント・ガレン市、サント・ガレン (St.Gallen) W-S 朝の集合から全日程 (12時、保護者の迎えの解散まで)
- これらの視察は、すべてレンタカーで巡回し

て行った。視察時間は、すべて、午前中で園ごとに多少は異なる。

- ① ブリュムクライゼル (Brummkreisel) W-K の案内は、元保護者 (父親) で森のようちえんの活動に魅せられ、仕事を変え、現在はW-Kの事務や施設管理のお仕事をされている、クリストフ・ワイドリッヒ (Christoph Weidlich) さんである。歩いている間もずっと説明をしていただき、日本の事にも好奇心を示していた。森の視察から戻り、園舎内や園庭を見せていただき、園舎内で質問に答えていただいた。
- ② ヴァルト・クレアティヴ (Wald-Kreativ-Kindergarten) W-K の案内は、園の主宰者であるラモーナ・マルクス (Ramona Marx) さんである。大雨の日であったが、森のようちえんを始められた話や発達障害者の保育について情熱を込めて語っていただいた。
- ③ バイエルンホフ (Bauernhof) W-K の案内は、農場経営者のキーク・ベッカー (Kieke Becker) さんで、夫はミュンヘンで働いている。ご自身の子育てを終えてから、環境を生かして森のようちえんを始めたとのことで、オーガニック食、土壌改良などナチュラル・ライフの大切さを語っていただいた。ご自宅を増設して保育室を創っていた。
- ④ バーデン森の学校の理事の一人、小学校の校長先生ヴェレナ・スパイザー (Verena Speiser) さんは、公務の合間にお忙しい中を2時間ほどボランティアで案内をしていただいた。園舎内も見せていただいた。
- ⑤ 朝の集合から帰りの会が終わり、保護者の迎えの場面まで全日程を視察したのは、最後のサント・ガレン森の学校である。この主宰者、エヴァ・ヘルグ (Eva Helg) さんは、視察前夜にホテルにお越し下さり、一時間以

表1 視察 W-K (ドイツ・スイスの森のようちえん) の特徴 (筆者作成)

園	森 (自然環境) の特徴	園舎、森の中の小屋	見学した活動	保育者と子ども	特記事項
①	園舎から約2キロ。市民の森と私有地の森で活動する。やや勾配のある5 ha以上の広さ。針葉樹中心だがラズベリー等の低木もある。牧場が隣接する。	二階建ての園舎あり(月・火利用) 園庭(自然な風合い)。芸術性の高い保育環境の部屋。パウワージェンは森の入口に二棟ある。青(上部)と緑(下部)。中には薪ストーブがある。	・松ボックリ造型 ・読み聞かせ ・自然観察 ・図鑑 ・落木・枝を鋸で切る	・全体把握と個別援助。遊具の運搬 ・2~4歳1グループ ・4~6歳2グループ ・グループごと保育者2名	・NPO 法人 ・代表: 保護者 ・子ども45名 ・保護者ボランティアグループ 毎1名
②	ほぼ平地の市民の森を借用している。集合場所から2キロ以上歩いた場所。針葉樹中心だが様々な果樹を含め植樹をしている	簡易な園舎が森の中にある(低年齢クラスの保育が行われていた) 避難小屋(パウワージェン)は一棟。	小屋の中 ・読み聞かせ ・絵画制作 テント下 ・バルーン遊び ・ボーリング遊び	・6名(身体表現の専門家を含む) ・インターンの研修生1名 ・2~4歳12名 ・4~6歳18名	・主宰者: ラモーナ・マルクス ・子ども30名 ・算数的活動(ボーリング)は、認可条件で。
③	農場および園庭(牛・馬・ロバ・羊・鶏・兎・犬・猫など) 浅い小池	自宅に繋げた保育室と別棟の園舎がある。年齢別に子どもの絵画の成長がわかるように掲示してある。	・集合場所から農場迄の散歩 ・途中の小森で短時間の遊び ・朝の会、軽食	・0~6歳25名 ・3グループ4名	・農場経営者が主宰する ・定期的に美術館や博物館を訪問し、社会見学をしている。
④	公共の森。なだらかな森。針葉樹中心。-8度までは屋外。園舎から1 km。路線バスで集まってくる。	園舎あり。森には枝木で囲いを造り、屋根にテントを張り、寒い時には中で火も炊ける。テントは毎日張り、撤去する条件がある。	・人形を使った森の素話。自然物による作曲活動。 ・工作。 ・活動計画を自ら立てる	・2~8歳(小学2年、水曜日のみ小学校) 研修生(森へ引率)	・小学2年生まで可能。5年経過。新学期8月中旬。
⑤	やや勾配のある公共の森。集合場所から2 km 歩く。-10度までは外で活動する。	園舎なし。避難には、農家や公共施設を利用する。	・人形を使った森の素話。 ・自然物の造形(泥団子、木の実のリースなど)	・1~9歳(小学3年。学校は行かない) ・104名(乳児1グループ、幼児・児童3グループ)	・小学3年生まで可能

上にわたり、資料を配布して詳しい説明をしていただいた。10時半ごろに、子どもは大抵持参してくる軽食(サンドイッチ、果物、野菜の丸かじりなど)を食べるので、12時過ぎまで活動しており、その後、帰りの会をして、保護者が迎えに来て、昼食は自宅で摂るのが通例である。子どもたちが帰った後、市街地のレストランと一緒に昼食をいただき、お話をさせていただいた。さらに、園舎とは別の街

中の事務所でプロジェクターを使っでの説明をしていただいた。

次に、各 W-K (W-S) の特徴を一覧表(表1)に整理した。

上の表に整理したこと重なるが、それぞれの園の特徴を述べておきたい。

①ミュンヘン北東部、空港北のフライジング(Feising)にあるブルムクライゼル('Brummkreisel e.v. Kindergarten') W-Kで

は、元保護者である男性のワイドリッヒ（Christof Weidlich）さんが案内してくれた。彼は子どもが森の幼稚園を卒業した後、園に残り運営に携わるようになった。そのために仕事を変えたとのことである。森のようちえんの仕事に生きがいを感じたのであろう。ここでは園舎から約2キロ先の市民の森を利用している。森の入口には、市の公園があり、ちょうど市の管理人が検査に来ていた。ドイツでは定期的に検査をしているようである。こうした安全管理の仕事はドイツ人の得意な分野である。入口には、避難小屋兼保育室がある。そこから少し勾配のある森の中を20分ほど歩いて行く。途中、針葉樹を中心に、低木の季節の花が咲いている。ブラックベリーやラズベリーも実っている。途中、遊び場になる広い場所や平原が見える所に出たりする。そして、やっと子どもたちが活動している場所にたどり着く。子どもたちは、枝を鋸で切ったり、北国特有の細長いマツボックリを集めて、模様を作ったりしていた。保育者は全体を見回しながら、一人ひとりに関わっていた。基本は見守りで、必要に応じて援助をしていた。図鑑や絵本も持ってきていた。こうした遊具や教具を運ぶのは大人の役割となっている。ここではタイヤのついたボックス型のものであった。これを森の中をごろごろと運ぶのは大変である。ここでは、朝の会や軽食の時間、帰りの時間は見学できなかった。そこには、二人の専任保育士と1人の保護者ボランティアがいた。運営責任者は保護者代表の方で、あとから来られた。子どもたちは一周3キロほどの森の中の数か所の拠点を中心に、工作活動や自然観察、絵本など楽しんでいるようであった。園舎内の施設も拝見した。

②ミュンヘン南西部ノイリード（Neuried）

のヴァルト・クレアティヴ（森の創造）（**Wald Kreativ Kindergarten**）**W-K**では、主宰者のマルクス（Ramona Marx）さんが雨の中を案内してくれた。集合場所から森の中を1キロ以上歩いて行くと活動拠点がある。雨対策としてテントが張られ、その下で小さなバルーン遊びやボーリングゲームをしていた。年長児はゲームをしながら算数も学んでいた。ボーリングのピンは材木で出来ており、絵と数字が書かれている。投げたボールで倒したピンの数字を記録して足し算し、算数を学ぶのである。これは、小学校への準備の意図で認可条件にもあるということであった。丸太のイスには、子どもが好きな動物の絵が描かれ、自分用の椅子として居場所となっていた。ここでは、軽食が取られたり、お話が聞かされたりすることもある。保育小屋の中も見学した。ローソクをつけて絵本の読み聞かせが行われていた。10人程度の子どもたちが2グループに分かれて1人は保育者、1人は保護者ボランティアがついていた。絵を描いているグループもあった。

③ミュンヘン北西オルヒング（Olching）のバイエルンホフ（**Bauernhof Kindergarten**）**W-K**は、農場主であるベッカー（Kieke Becker）さんが自宅と5 haの農場を開放していた。小さな池もあれば、羊や牛や馬もいた。集合場所から2キロ近く保護者も一緒に歩いていった。途中の小さな森で20分ほど遊んだ。それは、遅れてくる子どもを待つ意味もあるようであった。25人程度の子どもが遊ぶにはちょうど良い広さで周囲を木に囲まれ、適度に風や光も入り、登れる木があったり、遊びに適した倒れた古い木もあった。木登りは心と知性と身体への教育に効果があるとベッカーさんが力説していた。農場に入っていくと、そこで円になって、

皆で歌を歌った。移動を終えて新しい場所に着いたときは必ず集まり、点呼の意味も含めて、円を描き、手をつないで、歌を歌ったり、名前を言ったりしているようであった。農場内も広く、園児用に森のソファが作られ、軽食を取る場所となっていた。

どの園でも、朝の集いでは歌を歌う。集合した時は、友だちや保護者と話をする。移動する前、集まるまで少し待つので、早く動きたいというエネルギーが溜まっているという説明を聞き、実際に、友だち同士で競争しながら走って拠点から拠点へと移動する様子があった。1回目の活動拠点は遅れてくる子を待つ場所でもあった。10時半ころに再び集まり、子どもがリュックに持参の軽食をいただいていた。

ドイツでは、補助金を受けて運営されているが、十分な資金はないので、保護者がボランティアで保育に参加したり、園庭の遊具を共同製作したりしている。森の中では市民がジョギングや犬を連れた散歩をしており、時々、そうした市民に出会うことがあった。

スイスは、森のようちえんの設立がドイツより遅く、ドイツの影響を受けて始まったようである。見学した所は、設立してまだ5年ほどであった。スイスでは8月半ば新学期が始まっている。

④チューリッヒ北西部のバーデン (Baden) 森の学校 (W-S) の理事であるスパイザー (Verena Speiser) さんが小学校校長の仕事の合間にボランティアで案内してくれた。ここでは町からバスで森の入口に着くが、やはり1キロ程度は草原と森の中を歩いて行く。研修生の引率のため子どもは早くも泥水でズボンを濡らしていた。寒い日には心配なようであった。森の中で二人の保育者が人形を使って素話を聞かせ、

こちらもその世界に入り込むほど洗練された演技であった。音楽活動もレベルの高いもので、ペアでリズムを作る活動をしていた。そのあとは、思い思いの工作活動をしたり、自然観察をしたりしていた。ここには、小学校2年生も入っていた。水曜日だけは小学校へ行くということであった。

⑤オーストリアとの国境に近いサンクト・ガレン (St.Gallen) の森の学校には小学校3年生までがいるが、こちらは小学校へ行かずとここで活動をしていた。森の学校の主宰者、ヘルグ (Eva Helg) さんが前夜からホテルに来て説明をしていただいた。当日も子どもたちの集合する八時半から解散する12時まで、そして昼食をしながらの談話、事務所でのコーヒープレイクとプレゼンでの説明と2時過ぎまで詳細に活動の様子を教えていただいた。ここでは-10度までは外で活動するということである。9月とはいえ、+10度の日で、森の隣の牧場には太陽が照らしていたが、森の中は風も入りこみ、一人の女兒は寒さで元気がなくなっていた。保育者が気付き、防寒用に服を着替えさせ、手をこすり合わせたり、走ったりして体を温める場面があった。

次に、各園でインタビューした内容から把握したことを園ごとに書き出したものは、以下のとおりである。

① ブルムクライゼル W-K

- ・園庭の整備：保護者の仕事 (NPO 法人)
- ・最大45人：男女比考慮 (女子少め)
- ・バウバーゲン内部：温かい子宮のイメージ
- ・朝の集い：人数確認と予定のお知らせ
- ・ルート：いくつかあるが一つを選んでいく。
- ・小さなキャリー：食べ物・水・道具などを運

ぶ。

- ・ 4～6歳のグループ：小学校の準備も行う
- ・ 森の中の規則：棒で叩いてはいけない。木の実は子どもには食べさせない（子どもは見分けが出来ないから）。保育者が見える範囲内で活動するなど。
- ・ フリーゲーム：落ちている木などで造形する。
- ・ 公的な認可基準がある。
- ・ 認可の当局への定期的な報告書（自分たちのためであり、保護者には口頭で伝えている。行政当局への報告書は不要。定期（年1回）的な観察チェックはある。
- ・ 障害児の事：発達障害の子が増えている。
- ・ 遊びのスペース：コミュニケーション能力を育てる（意図的に行う）
- ・ 新学期：今日初めて道具を使っている。先週から始まって慣れてきたところ。
- ・ ゲーム：様々な物や数の暗記（視覚的）のゲーム。
- ・ 環境保護：釘など森に残さない。生きている枝や葉は取らない。生きている動物を殺さない。
- ・ ナイフ：使い方を教えて使わせる。
- ・ 小雨なら活動する（テントを張ることもある）
- ・ マイナス8～9度までは外で活動する。
- ・ 年間計画：計画はあるが、天候・子どものニーズに対応。
- ・ トイレ：自然に還ることを教えて原則としている。
- ・ 保育者の関わり方：肯定的な言葉かけを中心にしているが、余計な声掛けは制限している。
- ・ ドイツとスウェーデンのレベルの違い（研修制度はドイツなし。社会的地位の違い。）
- ・ 森の所有者のことも子どもたちに話し、使わせてもらっていることを伝える。
- ・ 日本のお客のことも話してある

② ヴァルト・クレアティブ W-K

1) バルーン遊び

- ・ バルーンを囲んで遊ぶ（歌、手拍子、踊り、動く）
- ・ ボールを回していく（歌：こぎつねこんこん、逆）
- ・ ボール（ウサギ）とボール（キツネ）の追いかけてこ（逆回し）
- ・ 逆に回るから気をつけて（保育者）～子どもたちは嬉々として遊ぶ～「もう一回！」「OK！」
- ・ 「ここは海です」「風がなく、静かです。太陽が出ています。風が少し吹いてきました。大きな雲が出てきて風が強くなりました。太陽がまた出て海は鏡のようになりました。きれいな青い水です。誰か泳ぎたい人はいますか。（挙手）。波が出てきました。誰か呼びたいですか。（挙手）。背泳ぎは出来るかな。」
- ・ バルーンの下でワニになる。
- ・ リラックスして横になる子ども。「背中に雨が落ちてきました。」皆で軽くつつく（歌）。「だんだん強く。」

2) ノルウェーの遊び（研修生：高校卒業の資格（アビチュア）習得後、職業を探している。）

- ・ 数字を覚えるゲーム（倒した木の数をチェックする）
- ・ 自然がスーパーマーケットである（R・Marxさん）
- ・ バウバーゲン内：個別活動（絵画、織物）、グループ別の読み聞かせ
- ・ 天使（木の作品）
- ・ 着替えの保管
- ・ 多様な教材・教具
- ・ 就学前教育の活動
- ・ 苗木を植えている（ワインの樽木や家具の木、

実も食べられる)

- ・一か月に一回、植物の専門家を招く(植物の変化を知るため)
- ・様々なハーブを栽培し、ケーキに入れたり、お茶にしたりする。

<テント下で談話>

- ・保育者が信頼される関係を子どもとの間に作るために、教員も子どももお互いに名前と呼ぶ。
- ・身体表現の保育者も今日は特別に来てくれた
- ・多様な背景を持つ子どもへの臨床心理の応用が必要である。

③ ヴァイエエルンホフ W-K

- ・森までのアプローチを歩く(保護者とともに)
- ・初めの遊び場で、木の実を潰そうと足で踏みつける子がいる。
- ・アジア出身の子が木の上にまたがって鉈で切りつけたり、枝でたたいたりしている。
- ・恐竜ごっこを楽しむ子どもたち。やや乱暴に岩を投げる。
- ・観察して、理解して、処方箋を出すようにしている。
- ・9:10分になったから次の場所へ行くという指示が出る(皆すぐに集まってくる)
- ・農場に到着後、サークルになって、挨拶。日本からのお客が飛行機で来たと言ふりを入れて話す。
- ・曜日や数字を皆で声を出す。移動して軽食(サンドイッチ、果物、野菜)。
- ・乳児クラスの保育者と子どもたちは別行動をしている。
- ・ベッカーさんが口笛を吹くと、ロバが一目散にかけてきて、雄たけびを上げる。
- ・ベッカーさんの事務室で説明を受ける(森のようちえんの一年の本:博物館訪問、お菓子

作り、劇、消防署訪問、美術館訪問、2泊の旅行、牛の赤ちゃんの誕生、観劇、小川での遊び、9月12日の入学式の入れ物。)

- ・ドロドロに服を汚す園と考えている人は多い。
- ・ADHDのこと。EM酵素による土の改良。カビのこと。エコハウス。
- ・ドイツの教育、州の監督、州法の本。
- ・自然の中で育つことの重要性を書いた本(病気の予防。はいはいが出来ないと影響を他にも与える)
- ・決められたルートでしか学べない教育で良いのか。広い環境のなかで学ぶことが大切ではないか。いろんな匂いを嗅ぐこと。泥んこ保育。
- ・森のようちえん出身の子どもの学校成績が良いこと。(自分の息子以外は…)そこには、両親の違いもあるが、学びの多様性がここにはある。例えば、鶏が雛を連れている光景を見ることがここでしかできない。
- ・ステンレス調理道具で音遊び
- ・モンテッソーリの縫い差し

④ バーデン W-S

- ・森へのアプローチ。走らせるために待たせる。
- ・インターンの研修生(1年間)。始めて1週間。教員養成は4年。一般は3年間の大学教育。
- ・別の保育者が泥遊びを止める。研修生は経験不足。定期バスを汚さないように。
- ・スイスでは鈴を皆つけている。動物が早めに去っていくようにする。
- ・動くことは空間的な認識を育てる。森の中と町では異なる環境。体を動かすことは頭を刺激することでもある。
- ・4歳から8歳の子どもたちを混ぜて保育をすることで学び合うことが出来る。

- ・ゲームの中で判断し、学ぶことがあるので、伝えていくことが出来る。
 - ・カレンダー（木造り、当番の子が日付をいれる）
 - ・笛を吹く（男性保育者、日本で見かけるホイッスルは使用しないということ）。「静かにしよう。」
 - ・世界の挨拶の歌。手拍子や手振りが入る。男性保育者の話し方が演劇調。日本人を紹介する。
 - ・保育者の指名で1人の女子が話し、保育者と全体で話をする。石器時代（石が寂しがっていたから家で楽しかったことを話してあげよう。別の二人の子も話をする）自分の活動にそれぞれ移動して行く。
 - ・鈴を鳴らして、森のお話が始まる。女性保育者。歌を歌いながら森の小人が登場し、葉っぱとお話（季節の変化は大きなテーマ）する。終わりの鈴が鳴る。（子どもたちは動いたり、私語をすることなく話に集中している）。皆で歌う。
 - ・拍子木でリズム遊び。保育者の真似をする。頭の上に拍子木を持って行き、話を始める。リズムづくりの説明。グループ作り。全体的に保育者の説明が多いが、子どもたちは辛抱強く聴いている（身体を多少は動かしている。）グループを保育者が指名。音の速度、大小の組み合わせ。
 - ・音楽カリキュラム（スイスの民族音楽の質は高いようである。）
 - ・テントハウスの下では、学校の学習もする。マイナス10度まで。別のテント（枝木での囲みが同様に有る）の下では中央で火をおこした跡が残っていた。
 - ・グループで作曲。保育者の笛（ホイッスルではなく、芸術的感性を高める音色の曲）で集まる。
- ⑤ サンクト・ガレン W-S
- ・朝の集合では、保護者と保育者が情報交換を行う。保護者も入って輪を描き、挨拶をする。
 - ・日本人の訪問者も紹介される。
 - ・保護者も入ったまま、朝の歌を皆で歌う。動物の身振りも入る。
 - ・歌が終わると、森に向けて出発する。
 - ・最初の集合場所では、シンボルの木の根を囲んで次の歌を歌う。中央の上には、ろうそくに灯がともっている。歌が名前を呼びながら歌えるようになっている。
 - ・保育者が優しい声でお話するが、子どもたちは静寂のなかで聴いている。
 - ・保育者が用意した赤い木の実を取り出して、どんな木になっていたものかを子どもに示させて輪を一周する。
 - ・別の葉っぱのついた枝を次から次へと子どもたちに取らせて、中央の飾りを完成していく。「それは何」と聞きながら、葉っぱや枝がどのようになっているのかをお話する。
 - ・保育者が鈴を鳴らし、新たな木の根っここのところで、ろうそくに火をつける。森の妖精のような人形を取り出して、その人形と別のキノコの人形が森の生活についての対話をする。子どもたちは聴き入っている。子どもたちもお話の中に入ってつぶやいている。鈴がなって話が終わる。子どもたちに話について発問すると子どもたちも回答している。
 - ・一人の女の子のカバンがないことが次の遊び場で気づいたが、どこに紛失したかはわからない。
 - ・遊び場では、2～4人ぐらいのグループでごっこ遊びが始まる。保育者が必要に応じた援助をするとのこと。

- ・先程の劇の話の役についても少しづつ学ばせていく。
- ・保育者の提案で、木の実の糸通しの遊びを展開する。
- ・様々な工作や活動は、認可の条件にもある。
- ・子どものアイデアを生かして、子どものモチベーションを大切に、援助していく。
- ・土遊びをするグループ（3歳程度）では、二人がトンカチで土を掘り起こして、枝で土を集め、ボールの中に集めていく。二人で対話しながら、土を掘ったり、集めたりしている。話し続けている。黙々と作業をしているのではなく、トンカチを地面にリズムよく、身体を動かして、掘ること自体も楽しんでいる。
- ・保育者が持参したビニールのマットを円を描いて一人の子どもが保育者に見守られながら並べる。保育者と対話しながら活動している。すべてのマットをきれいに保育者の言葉かけもあって並べる。
- ・遊びの途中、ハーモニカが吹かれて、子どもたちが集まっていく。保育者がリードして、手をたたいたり、振ったり、体全体を動かす。一人ひとりがリュックから軽食を取り出し、マットの上で食べる。リュックの行方不明な子どもは、木のお皿に何人かの子どもと保育者から食べ物を分けてもらう。パンや果物・野菜など。食べ終わった子どもから、遊びに戻っていく。
- ・泥団子あそび、草笛あそび、木の実を食べ続ける子などいろんな遊びをしている。
- ・トイレに行きたい子どもを集めて、身体に入れた食べ物が自然に還っていくことも学ばせるとのこと。
- ・赤い木の実は似ている毒のものもあり、図鑑で確かめていた。森の至る所に赤い木の実が生っている。
- ・一人の女兒が寒さで震えていることに保育者が気づき、手を合わせて叩きあわせる。若い男性の保育者がその子のリュックの中から防寒服を出して着せる。その後、その子と一緒に辺りを走り回る。最後に、手をこすり合わせる。隣の太陽が照らしている牧場をさらに

1	四季のリズム	(四季の自然循環過程でその経過を直接体験する。)
2	運動誘因・可能性の多様性	(自然の空間の中で身体の可能性と限界を体験する。)
3	五感	(五感すべてが自然環境の多様性に一致する。知性も刺激され、促進される。自主的な振る舞い、試み、調査、発見そして体験を学ぶ。)
4	心的な動きの促進	(全身的な、集中的な行為のための空間に取り巻かれているという理想的な条件下で、心的な動きの促進が起こる。)
5	こだわることができる	(個々の欲求に応じて活動し、観察することができる。騒音や空間的な狭さといった障害となる要素がなくなる。)
6	想像力、ファンタジー	(ファンタジー(想像力)を自由に発揮することが出来る。)
7	全体的な教育	(芸術的・美的育成の多くは、自然の素材に依っているため、芸術的、美的教育も行われる。)
8	静けさ	(静けさの中で、飛び交う言葉や自然の声に敏感になる。)
9	人間の実存的な生活の基礎	(火、水、空気と大地を体験、霧、雪、雨や雹のような自然現象との出会いが、人格を豊かにする。)
10	社会性の教育	a) 社会的コンピテンス：お互いを頼りにするを通して、グループや個人の社会的能力が強められる。 b) 障害児の受容：障害を持つ子どもを、障害に応じた形で受け入れることが求められる。 c) 行動障害の子どもの行動の再構築：行動が特異な子どもは新しい経験や体験に基づき、異なる行動のパターンを構築するチャンスがある。
11	子どもの健康と免疫システムの強化	(どのような天気であろうと、新鮮な空気の中での運動は、健康を促進し、免疫システムを強める。)
12	「自然への敬意」	(自然あるいは世界への敬意、そして自分も生命の一部であるという理解が、愛情、信頼、責任という感情を子どもの中に呼び起こす。)

図1 ミクリッツの「Wald-Kindergarten」(森のようちえん)のコンセプト⁵⁾

保育者と散歩する。

これらの一つひとつのコンセプトに照らして、五つの森のようちえん、それぞれの視察の内容を照合すると、表2のようになった。

Ⅱ ミクリッツの「森のようちえんの理念」と視察の実態

ミクリッツ（2004）は、森のようちえんの理念を、12項目にまとめている。それらは、図1のとおりである。

さらに、ミクリッツの12のコンセプトと、今回の視察の結果を総合的に合わせて検証すると、図2のように整理された（⇒ 以下の部分にまとめた）。

表2 ミクリッツのコンセプトと実際との照合

（筆者による判断：視察の範囲で視認○、視察から推測○、推測不可-）

	①ブルム・クラ イゼル	②W・ク レア ティヴ	③バイエルンホ フ	④バーデン	⑤ St. ガレン
1 四季のリズム	○森の変化体験	○森の変化体験	○動植物の観察	○森の変化体験	○森の変化体験
2 多様な運動	○	○身体表現遊び	○木登り、走る	○走る、リズム	○走る、登る
3 五感（総合性）	○森での生活	○森での生活 ハーブ栽培	○森での生活 動物に出会う	○森での生活 森に響く木の音	○森での生活 森に差し込む光
4 心的な動き	○	○	○	○	○
5 こだわり・個性	○自由な活動	-	-	○自由な活動	○自由な活動
6 想像性	○造形遊び	○バルーン遊び	○ごっこ遊び	○船の造形	○泥団子遊び
7 全体性	○造形活動	○造形活動	○絵画制作	○音楽活動	○造形活動
8 静けさ	○森での生活	○森での生活	○森での生活	○森での生活	○森での生活
9 生活の基盤	○森での生活	○森での生活	○野外生活	○森での生活	○森での生活
10 社会性の教育	○協同活動 マツボックリで 造形	○協同活動 バルーン、ポー リング	○協同活動 朝の会	○協同活動 リズム作り	○協同活動 素話準備の手伝
11 健康と免疫	○森での生活	○森での生活	○有機食品給食	○氷点下の活動	○木の実（食）
12 自然への敬意	○森での生活	○森での生活	○命の誕生に出 会う	○森でのお話	○森のお話

- 四季のリズム： 四季の自然循環過程でその経過を直接体験する。
⇒ 一年を通して、自然の中での遊びが展開し、拠点となる場所の四季の変化を体験できる。四季の変化の中に科学に対する意識の芽生えがあり、美しいものに感動する心が養われる。
- 運動誘因・可能性の多様性： 自然の空間の中で、身体の可能性と限界を体験する。
⇒ 木登り、走る、歩く、斜面に応じた身体の動かし方など多様な運動がある。柔らかな身のこなしは心の柔軟さにも繋がっていくであろう。
- 五感： 五感すべてが自然環境の多様性に一致する。知性も刺激され、促進される。自主的な振る舞い、試み、調査、発見そして体験を学ぶ。
⇒ 動植物とのふれあいを通して触覚や嗅覚・味覚を養える。視覚には、様々なみる（診る、観る、看るなど）がある。聴覚には様々なきく（聞く、訊く）がある。五感が総合化されたときに、鋭い感性や知性が芽生えてくる
- 心的な動きの促進： 全身的な、集中的な行為のために空間に取り巻かれているという理想的な条件下で、心的な動きの促進が起こる。
⇒ 自然との出会いは、感動や不思議に思う気持ちを高め、知的好奇心を育てる。美しい造形物に心を癒されたり、生命というものに出会い、感謝の心や愛する気持ちも育つ。
- こだわることができる： 個々の欲求に応じて活動し、観察することが出来る。騒音や空間的な狭さといった障害となる要素がなくなる。
⇒ 自由活動が多いので、一人ひとりの興味関心に応じた遊びがある。広々とした場所で、の

- びのびと活動できることは子どもの心を広げ、ストレスの発散から全身の癒しにも繋がる。
- 6 想像力、ファンタジー： ファンタジー（想像性）を自由に発揮することが出来る。
⇒ 自然物を様々な物に見立て造形遊びやごっこ遊びが展開することで、想像性が高まる。
- 7 全体的な教育： 芸術的・美的育成の多くは自然の素材に依っているため、芸術的・美的教育も行われる。
⇒ 自然の中で全身を使って活動するので、子どもの全ての可能性を刺激する。自然はそのまままで芸術的である。そこに命を吹き込む人間の精神がさらに芸術性を高めるが、自然はその中に可能性を秘めている。子どもたちは、自然の発見を通して、感性を豊かにしたり、知性を芽生えさせたりする。また、自然を大切にしようという気持ちも養う。
- 8 静けさ： 静けさの中で、飛び交う言葉や自然の声に敏感になる。
⇒ 30人程度の人数で、大きな森の中で活動する。保育者も見守りを中心にして、森のルールブックを子どもに与えているので、必要以上に注意を与えることもない。子どもは活動に集中する。以上の事から、子どもの活動は、静けさの中で行われていることが多い。また、朝や帰りの会で、素話や絵本の読み聞かせがあるが、朗読の仕方によっては、静けさをさらに感じることが出来る。
- 9 人間の実存的な生活の基盤： 火、水、空気と大地を体験、霧、雪、雨、雹のような自然現象との出会いが、人格を豊かにする。
⇒ 冬の寒い時には、森の枯れ木や落ち葉で燃やして暖をとるのが人間の生活の原点である。子どもたちも、氷点下の森の中で、火というものを体験することが出来る。雨が降ろうと、雪が降ろうと余程のことがない限り、森の活動は変わらない。酸素の多い新鮮な空気を吸ってスピリチュアルな精霊を感じて、自然の力や神秘さを感じ、人間の生き方を見つめることであろう。
- 10 社会性の教育： a) 社会的コンピテンス：お互いを頼りにすることを通して、グループや個人々の社会的能力が強められる。b) 障害児の受容：障害をもつ子どもを、障害に応じた形で受け入れることが求められる。c) 行動障害の子どもの行動の再構築：行動が特異な子どもは新しい経験や体験に基づき、異なる行動のパターンを構築するチャンスがある。
⇒ 二人以上のグループ活動がよく行われるので、コミュニケーション能力が身につく。森の生活ではルールを守ることが大切なので、規範精神が養われる。
- 11 子どもの健康と免疫システムの強化： どのような天気であろうと、新鮮な空気の中での運動は、健康を促進し、免疫システムを強める。
⇒ 外気の中で長時間動き回り、活動する。少々の雨天や寒冷気候の中でも活動する。これらによって、健康や免疫が向上する。
- 12 自然への敬意： 自然あるいは世界への敬意、そして自分も生命の一部であるという理解が、愛情、信頼、責任という感情を子どもの中に呼び起こす。
⇒ 人間の手には負えない天候の変化、生き物の成長や生命連鎖、自然の変化などを見聞・体験して、自然の摂理を感じ得ることで、敬意を抱くようになる。

図2 ミクリッツの12のコンセプトの検証～視察の結果の総合から～

おわりに～今後の研究課題～

今回の貴重な視察を終わり、次のようなことも新たな発見であった。

- 1 半日とはいえ幼児が森の中で活動して過ごすということは相当な体力（免疫力やバランス力を含めた）が養成されるということ
- 2 そうした体力が子どもには潜んでいるが一般的に眠っている場合が多いという予想が出来ること
- 3 目的はなくても落ちていた枝を鋸で切る活動や目的を持って船を作る活動があるということ

- 4 静と動のリズムある一日の流れを工夫していること
 - 5 子どもの発達や心理を踏まえた活動や援助を考えていること
 - 6 保育者が音楽活動や劇活動、造形活動などのテーマ学習（プロジェクト活動）を行うことがあるということ
 - 7 保護者の交流も重視しているということ
- 等々、様々なことを学ぶことができた。そして、単に「健康」と「環境」という領域に限定されず、「表現」と「人間関係」と「言葉」の領域の活動を含めた「総合的な幼児教育の場」として、森のようちえん・学校が存在するという確信を

得ることができた。ドイツもスイスも経営的には課題があり、特に財政面では苦労しているようであった。北欧諸国に比べると、保育者の社会的地位は相対的に低く、給与面にも反映しているようである。北欧諸国は、保育者になるには10倍近くの競争率があり、それが保育の質にも影響を及ぼしていると今回聴くことがあった。保育者の研修への努力も欠かせないと言われていた。韓国では、すでに保育専攻の大学を卒業後、半年間の研修プログラムがあると聞いている。また、デンマークなど北欧諸国も保育者の研修が充実しているとのことである。

今後の研究課題の一つとして、森のようちえんの保育の質を高めるために、保育者養成・研修プログラムの研究が欠かせない。基本的な養成プログラムを国外から学ぶことになるであろう。また、研修プログラムには、現場研修という実践を通してのプログラムと養成プログラムの高度化を図る大学院・専攻科レベルのプログラムとが考えられる。国内の森のようちえんの実践者も実践課題の調査も必要である。

さらに二つめに、認可条件の検討も欠かせない問題である。ドイツの認可条件については、州法によって規定され、デンマークや韓国の認可条件は、国レベルでの法律規定が出来ている。今後、日本において認可条件の検討が行われて

いく中で先行事例の研究が欠かせないであろう。

注

- 1)～3) 公益法人・国土緑化推進機構・政策企画部・木俣知大、「森のようちえん Café Tokyo 大講演会：日本における森のようちえんのこれから」2013年11月18日、「森のようちえん全国ネットワーク開催」シンポジウム、パワーポイント資料。
- 4) 杉山浩之、「『森のようちえん』の理念と研究課題」、『広島文教女子大学紀要』（第48巻、pp. 13～27）所収、2013年12月。
- 5) 木俣知大、前掲書。

参考文献

- 1 木戸啓絵、「森の幼稚園の事例研究～ホーリスティック教育の観点から～」、青山学院大学教育学会紀要「教育研究」第56号、pp. 23～33、2012年。
- 2 木戸啓絵、「現代の幼児教育から見たドイツの森の幼稚園」、『青山学院大学教育人間科学部紀要』第56号、pp. 1～17、2012年、所収。
- 3 今村光章編著、「ようこそ！森のようちえんへ」、解放出版社、2013年。

追記 2012年11月から始まった本研究の成果は、①大学の授業において、②本学紀要（2013年12月発行）に第一論文発表、③韓国のミニレポートを「日本保育学会会報」（2013年9月1日発行、第157号）で「海外レポート」として報告、④ドイツ・スイスの視察報告を「森のようちえん全国フォーラム（2013年11月18日）の早朝オプション（50名以上の参加）で公表してきた。今後も国内外の「森のようちえん」の研究を深め、「大地に立ち、地球の未来を担う人間の土台を育成する森のようちえん」の構想を研究して行きたい。